

父の物語られた青木猛比古

正田 泉

堅田郷汐月村疋田実（疋田泉亡父。名は毅。実は幼名）はよく猛比古に愛せられてゐた。此の逸事は其の實の直話を筆記したものである。

実が猛比古に愛せられてゐたのは猛比古が神祇伯白川家に仕へてゐたので、実が堅田郷神主の家の者であると云ふ事の関係上もあつたであらうが猛比古は実を伴つて白川家に弟子入れして勤王の士に仕立て、同士の者を拵へようと思ふ念が熱烈であつたからである。実は疋田家の総領息子であつて、当時家を出られぬ身分である。六才で父を亡ひ母国子の手で育てられたので、母は素より実を手放すなどの事は絶対に成し得ぬのである。けれども実は猛比古に伴はれて上京する事を頻りに望んで居た。時は慶応二年実が十七歳元氣盛りの折であつたからでもある。猛比古は母国子に向つて再三実を是非白川家に入らしめる為に共に伴はしむべく懇々時勢を説いて勤めた。而も国子の承諾を得るに至らなかつた。一日密に『翌朝七ツ時（午前四時）に柏江から乗船直に上京の事になつたから、母に見付からぬ様に家を遁れ出よ』と命じた。実は手荷物少しばかりを括つて約の如く夜半より柏江に赴くべく準備したが、予て注意を払つて居た母から直に発見せられて厳しく訓戒された。猛比古は猶予のならぬ身であるので遂に単独乗船出発した。後にて聞けば実の来るのを頻りに待つてゐたとの事であつた。

幕府は猛比古の絵姿までを廻してどうにかして佐伯藩に命じて捕へしめようとしてゐた。けれども天領地に封しては由来何事も扣目がちな佐伯藩の事であつたから猛比古は却つて卿地堅田が割合よい潜み場でもあつた。而も常に白川家の符符を推帯して居るので、当時京家の威望が日に増し強まつて居た折からであるので佐伯藩も猛比古を捕へることを躊躇してゐた。

猛比古郷にあるや常に身装を商人にやつし、外出には股引がけ、天秤棒に手綱を括りつけて之を肩にし、頬かぶりの出立ちであった。一週間か永くて一ヶ月も居るかと思つて居る中に俄然姿を何処へか匿して仕舞のであった。

潜める身からでありながらも豪膽な彼は、折々火繩銃を提げて藩の禁鳥（当時鶴多くて寧しろ害鳥の感あったとのこと）鶴を撃つて宴膳を賑はす様の事もあった。或る時野々下儀平太（野々下道太郎氏の亡父）等と共に前記実の居宅で親睦の一宴が開かれた。折から麦鶴教羽前面の水田に下り立つて餌をあさつてゐた。猛比古直に一羽を獲来つてムシル裂く。近隣怖れて之を停むれば何するものぞと自ら煮る焼く、さあ食へといふこともあった。

交はりしは前記野々下、疋田以外尚江国寺玉海師とも中々の親交があつた。一日此等数名ともに柏江酒屋の二階（野々下儀平太宅）に相会して又も一宴が催された。欄間の懸額長三州筆を見て猛比古は玉海師に之が読解をすべく戯れた。師謙讓之を辞した。猛比古笑つて筆おつとり鼻紙拵げて一狂歌を書いた。

よみしらず揚火の玉にもならざればまるき頭はある甲斐もなし

牡蠣採主柏江茂八郎

蓋しよみしらずとは世見知らず、読不知、を兼ね。牡蠣採主は書取主。牡蠣は昔から柏江の名産物。一座大に賑ふ。

猛比古常に友に示されてゐた作中、記憶に存せるものは、かのいかりゐの云々の一首と、尚

吾本神州清潔民、謬為仏奴説風塵、如今乘仏休恨、吾本神州清潔民

幼時曾て海福寺の弟僧であつたのが脱出上京したとの事である。此の作は豊前の字者小野清秀氏著国粹哲学中に載せられてあるけれども今其の作者名も何も記してはない。聞くに猛比古の実作が猛比古の生存中に地人の作の如く世間に流布せられて居たのを猛比古が聞いて、世には不申斐ないこともあると嘆じて居たとの事である。

佐伯藩士下川黄太と云う人（蒲江小学校長下川勝三郎氏亡父）と猛比古と相合した事実もある。猛比古「男子苟も一刀にても腰にせる以上、之を打振るの道練らざんばあるべからず」とて友人少年等に勤めて例の柏江酒屋の土蔵中親桶の傍で自ら指

南者となつて竹刀稽古をせしめて居た。時に下川黄太郎長鎗一本で諸国を巡業し年を経帰つて来たけれ共、何かの都して天領地に居った。親族上の関係もあるので疋田実の宅に寓して居たが、実は下川を野々下儀平太に介した。儀平太は大に喜んで好適手面白しとて猛比古に廣太あることを告げた。廣太も一簾の蒙腹者で、疋田に居ても常に得意の長鎗を打振つて毎日木の的を相手に独修業をやる。而して尚ひまにはえがみの鱧(えがみの鱧は昔から堅田で有名なものである)を帯刀のまま掘つて来て非常に之を嗜んで居た。農夫等之を制して『うちの所の田を勝手に掘つては困る。そこに注連の張つてあるのが見えぬか』と咎めれば『何を云ふか、おれの腰のものがわからぬか』などいって、委細意に介する様子ではなかつた。田夫等呆、怖れて為すがまゝに任せてゐたとのことであつた。

猛比古は下川の事を聞いて「一本稽古してもらおふ」と儀平太の勧めを承若した。実も下川に頻りに勧めて一日酒屋の土蔵の中で鎗と竹刀との組合準備が纏つた。両雄初対面の挨拶、随分先づ聞物であつた。廣太は大兵、猛比古は小柄、やがて身構も出来て互に立つた。甲は真自目、乙は快活ヤアヤアと暫時睨合、わたりあつて居たが一機猛比古は深く下川の手元につけ入つてオメン一本とやった。それから其儘互に取物を於き一礼各互に技倆を賞嘆しつゝ一盃相交へて下川は疋田に飯つた。以後再度の立合もなくして両雄は別れた。

猛比古の持つてゐた白川家の合符といふものは上り下りの道中などに餘程効けたものであつたと見え、幕府の方から常に捕へられようとして居た身でありながら、此の合符の為に、どんな関所もどしどし通ることが出来たさうである。曾つて備前とかで関所は無事に通つたが、其夜宿所で捕手につけられて居つたのを知つたから、夜中密に起立で、急遽発足の身仕度して宿屋の昇降口に腰打掛てゐた処に銃声一発耳朶を掠めて飛んだ。流石の猛比古も此時ばかりは此の世の身ではないと思つたといつた。そしてその盛暗夜にまぎれて遁れたとの事。

猛比古が肌身放さなかつた品は、熊野大神(氏神)の守袋と、かつて長州奇兵隊に入つて彼の高杉晋作のもとにあつて数回の戦場であつた敵首の数のかはりに其の陣羽織の肩掛の箇所を切抜き、それぞれ敵武者の氏名を書付けてあるものであつた。

そして之を折々実等に出して見せて当時の武者振を物語って居た。

以上は野々下氏の記された幕末の志士青木猛比古と題せる記事に思ひついて、余が曾て亡父足田実（足田毅の幼名）に聞き得たきれぎれの事どもを記して見たのであるが、尚明治二十七年八月の頃に読んだ事のある大分縣共立教育雜誌（發行年月日等に記憶にない）に大分縣立中学校長津田紙一氏によって猛比古最後の事が記されてあつた様に覚えて居るけれど其の雜誌もない。津田氏に伺つて見たらと思つてゐる。

（大正十三年八月記）